

「九州・熊本の戦争遺産」

2/20版

くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク 代表 高谷和生

1 はじめに ～戦後80年の諸相～

Q：これまでに、どのような活動を続けてこられたのでしょうか？

□戦後世代としての「私の視点」 ～近現代考古学との出会い～

□戦争遺跡保存全国ネットワーク全国運営委員、空襲・戦跡九州ネットワーク事務局長

□平和憲法を活かす熊本県民の会代表幹事、菊池恵楓園ボランティアガイド、一般社団法人くまもと戦争と平和のミュージアム設立準備会理事、肥後考古学会監査・幹事

Q：歴史観、戦争遺跡・遺産への視点は？

□熊本県内戦争遺産の「調査・研究活動」と「啓発活動」は、「両輪の活動」

□その活動そのものが「未来への継承」である。戦後世代高谷の「平和継承の活動」

□戦争遺跡は、歴史の遺産であり、忘れてはならない「歴史事実の厳粛なる遺構であり、「モニュメント」である。

□さらに地域が戦争で失った貴重な人命、地域の自然や文化、そして地域が戦災のあと復興し生きてきた歴史を考えるうえからも、戦争遺跡の調査研究・保存活用は重要である。

□戦争遺跡・遺産の学び・見学での「戦争の加害や被害の両面」からの歴史認識の重要性

□的確な歴史認識と時代背景や地域特性に関する基礎的な学びの保証

□「東アジア史の視野」と「地域の戦争史の認識」での両者の位置付け

□近年、文化財活用論に圧され、全国では単に関心のハードルを下げる手法が多用されるが、誤用された昭和期の「満洲戦蹟保存運動の反省」を踏まえ、徹底した「戦争と平和の学び」の学習保証と、戦争遺産が「国民の共有財産・ヘリテージ」である文化財認識が重要ではないでしょうか。

□『くまもとの戦争遺産』2020年熊日出版 熊日出版文化賞・地方出版文化功労賞他

□熊日新聞での高谷連載・わたしを語る「平和のバトン 未来へ」令和6年6月21日～9月3日・全51回

2 九州の戦争遺跡・遺産

(1) 戦争遺跡とは？ 戦争遺産とは？

□戦争の痕跡、戦争関連の遺跡、戦闘のあった跡、略して「戦跡」

□「近代軍政が始まった明治期から太平洋戦争終結後の近代の戦争遺跡。「近代日本の侵略戦争とその遂行過程で、戦闘や事件の加害・被害・反戦抵抗に関わって国内国外で形成され、かつ現在に残された構造物・遺構や跡地のこと」

※『しらべる戦争遺跡事典』『続 同書』柏書房 2003年

□戦争遺産は、戦争遺跡・遺物、戦時資料、米軍資料、戦時体験や証言等を含めた「後世に継承する戦争に関わる事物」

(2) 戦争遺跡 ～熊本県の状況、全国の状況 等～

□全国の戦争遺跡は「約50,000」件、指定登録は「319」件

2021年10月2日現在

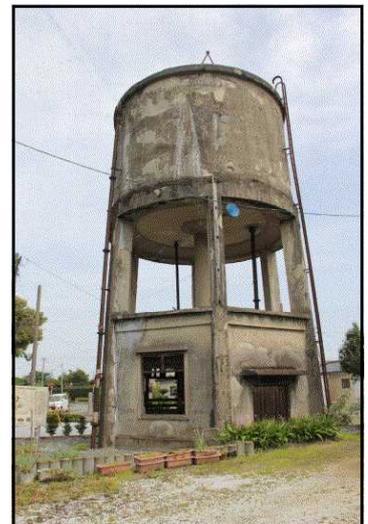
□熊本県内の太平洋戦争期の戦争遺跡総数は、多数の特殊地下壕を含めた「723件」

□拙書『くまもとの戦争遺産』内の一覧表には「249件」を精査し記載。くまもと戦跡ネットHP内で、逐次更新

□熊本県内の指定登録文化財は国148件、県383件、市町村3,382件、国登録文化財156件の計2,382件

□『しらべる戦争遺跡事典』『続 同』柏書房 2003年 絶版

□2025年7月刊行予定『新・戦争遺跡事典（仮）』大月書店



菊池市指定文化財「花房飛行場給水塔」菊池飛行場

(3) 太平洋戦争期の指定等

「花房飛行場給水塔」（陸軍菊池飛行場高架水槽・菊池市指定有形文化財）、「永山の掩体壕」（陸軍人吉秘匿飛行場木製有蓋掩体壕・球磨郡あさぎり町登録文化財建造物）の2件。また、合志市の「黒石原飛行場奉安殿」は、保存修復事業を進めており、完了後に国登録文化財となる予定である。また、「東京第二陸軍造兵廠荒尾製造所変電所」は、荒尾市が所蔵・管理している。

□戦争遺跡保存全国ネットワークHP内 戦争遺跡 指定・登録文化財の動向（2024年8月時点）旧陸軍関連、旧海軍関連、民間・軍需工場・その他指定登録文化財一覧として整理。逐次更新

(4) 九州の「戦争の歴史」をたどる ※「沖縄」地域を除く
 ～九州に残された「戦争遺跡七項目」と、さらに「戦争遺産二項目」～

Q：九州地域に残る戦争遺跡の現状と特徴は？

九州エリアは福岡・佐賀・長崎・熊本・大分・宮崎・鹿児島県の七県で成り立つ。国内最西端で朝鮮半島・中国大陸に近接する地政学的要因から、特徴的な戦争遺跡分布が認められる。明治政府成立から太平洋戦争に至るまで、九州内の特徴は「七項目概要」と「二項目」

①西南戦争遺跡

西南戦争は、一八七七年（明治一〇）年、中・南九州一帯で生じた国内最大・最後の内戦である。鹿児島市内では城山・鶴丸城跡等の史跡指定の西南戦争関連遺跡や敷根火薬製造所跡等が良好に残され、併せて県により高熊山激戦地跡等の調査が行われている。熊本県では薩摩軍・西郷軍と政府軍・官軍の激戦の場となった田原坂をはじめ横平山等では、砲台及び官軍墓地等が良好に残る。平成二五年三月二七日に、熊本市・玉東町に所在する九遺跡が西南戦争遺跡群として国史跡指定を受ける。熊本城内調査でも銃弾等が出土している。宮崎県内では、長尾山一本松陣地等の和田越周辺の戦跡、鳥川陣地等の耳川沿岸の戦跡調査が県主導で行われている。大分県内では三国峠等を中心として県内台場跡八八〇基の確認も進んでいる。



耳川沿岸の戦跡「鳥川の陣地」
宮崎県日向市

②陸軍聯隊・師団の設置と海軍佐世保鎮守府

一九七一（明治四）年四月、新政府は小倉に初となる西海道鎮台本営を設けた。その後、熊本に鎮台本営を、第二分営を鹿児島におき鎮西鎮台とした。徴兵令公布後に熊本鎮台と改め、熊本城内に本営を移して小倉に営所、日田に分営を置いた。神風連の乱、西南戦争を経て明治十八年五月鎮台条例改正にともない鎮台条例が廃止され、新たに師団制が発足する。詳細は各論に譲るが、一五年戦争期九州内の各師団・聯隊配備は、久留米に第一二師団で麾下には第一四聯隊・小倉、第二四聯隊・福岡、第四八聯隊・久留米、第四六聯隊・大村が、熊本に設置された第六師団では、麾下に第十三聯隊・熊本、第四七聯隊・大分、第二三聯隊・都城、第四五聯隊・鹿児島が配備されている。敗戦後、各聯隊施設は自衛隊施設等となり、一部の建物も継続使用され現存する。熊本城内と市域には師団関連施設、熊本幼年学校施設が残され、久留米市内には軍都を構成してきた軍施設、遙拝塔等のみならず、軍都を形成させた民間建物等も残され街全容を見る。併せて第一次世界大戦期の特徴的な戦争遺跡として久留米俘虜（ふりよ）収容所が設けられ諸調査が行われている。



佐世保無線電信所「針尾送信所」
国重要文化財 長崎県佐世保市

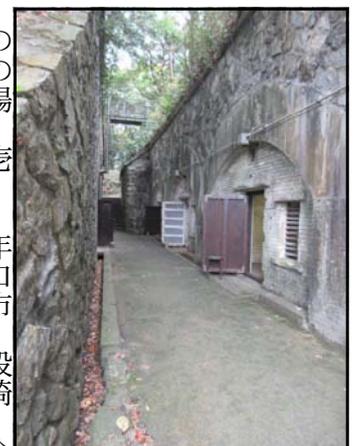
一八八九（明治二二）年に開庁された佐世保鎮守府は、九州を始めとする西日本地域一帯の防衛と大陸進出の根拠地としての海軍軍港施設・行政府である。二〇一六年（平成二八年）四月佐世保鎮守府庁・水道施設群・武庫倉庫群等が文化庁より、日本遺産「日本近代化の躍動を体感できるまち」に認定されている。なかでも佐世保無線電信所（針尾送信所）は、日本海軍が一九二二（大正一一）年に建設した長波無線電信施設で、国内で大正時建設の塔状構造物としては唯一現存することから国の重要文化財に指定され、その姿は圧巻である。

③明治期要塞と昭和期要塞

日本における要塞構築は、日清戦争、続く日露戦争を経て、明治の末、函館・対馬・佐世保・長崎など要塞配置の検討が行われた。その後一九一四年の第一次世界大戦では航空機、潜水艦など新兵器が登場するなか敵艦侵入阻止の視点で、海上防衛体制の強化が課題となった。一九二六年「要塞司令部の新設及び廃止」に伴い九州では、豊予、壱岐要塞が新設された。

下関要塞は、関門海峡東側及び西側入口への敵艦侵入防禦の砲台、下関及び企救半島への敵上陸防禦の堡壘を、一八八七（明治二〇）年から北九州市域に七カ所、下関市域に八カ所構築した。下関市域・山口県西部では、火の山砲台、龍司山堡壘等が良好に依存する。北九州市域では、矢筈山堡壘、手向山砲台等も良好である。

佐世保要塞は一九〇〇（明治三三）年、佐世保軍港防衛のために設置された。要塞砲台は佐世保湾入口の俵ヶ浦半島、西彼杵半島寄船崎を中心に配置され、一八九八年から一九〇一年までに主要部が完成した。佐世保要塞は廃止後、ほとんど人の手が加えられておらず、ほぼ全ての砲台跡が当時のままに残っている。高後崎砲台、石原岳堡壘等があり、丸出山堡壘観測所は、装甲掩蓋が完全に残り全国的にも貴重である。



矢筈山堡壘の掩蔽部
北九州市門司区

昭和期の**対馬要塞**では豊砲台等が、**沓岐要塞跡**では、**的山大島砲台**等が良好に遺存する。昭和期の**下関要塞**は**蓋井島砲台・大島砲台**等が良好に遺存している。

奄美大島要塞は、日本海軍の根拠地となる大島海峡を防備するため、一九四一年以降日本陸軍が構築した沿岸要塞である。大島海峡全域に残存しており、当時の配備状況や構築目的、セツト関係を確認することができる。なかでも**安脚場各砲台関連施設**や**手安弾薬本庫**は、重厚な鉄筋コンクリート構造で構築要領を基に規格的に構築されており、残存度が良好である。二〇二三年三月国史跡に指定された。明治期から昭和期への要塞機能の変容は、近代日本の軍事戦略の変化を追い、東アジア近代史を理解するうえでも重要な遺跡といえる。



奄美大島要塞西古見砲台第二観測所
鹿児島県瀬戸内町

④陸海軍飛行場

沖縄県を除く九州内では、**陸海軍飛行場**は、**陸軍正規二七箇所**、**海軍正規二七箇所**があり、九州エリアの特徴である大戦末期の**本土決戦時特攻用の陸軍秘匿二三箇所**、**海軍秘匿七箇所**の「計八四箇所」を数える。また、**有蓋掩体壕は六四基**、**無蓋掩体壕は四九基**の計一一三基である。代表的なものとして**RC有蓋掩体壕が宇佐に一〇基**、**宮崎に七基**、**築城に三基**、**出水に三基**、また**木製有蓋掩体壕が陸軍人吉秘匿飛行場に五基**まわって残され、一部は指定・登録文化財となっている。



大刀洗北飛行場中型有蓋掩体の公開に向けての整備様子
福岡県大刀洗町

⑤本土決戦の臨時要塞と防空陣地、特攻基地

大日本帝国終焉期であり、各県ともに戦争遺跡数が最大となる。北九州の**防空陣地**の全六九箇所は、西照空陣地、総牟田高射砲陣地等が遺存し、照空灯台座やタチ三号電波測定機基礎構造物も残る。豊後水道を挟む豊予要塞の愛媛県**佐多岬砲台**の対岸となる**関崎砲台**等が残り**丹賀砲台**は砲台園地として整備されている。豊後水道・響灘・玄海灘沿岸部には多くの防備衛所が残る。

一九四四年七月の捷号作戦準備のためは宮崎平地沿岸正面、志布志湾正面、吹上浜沿岸正面が防衛を強化する沿岸要域と定められた。中でも志布志湾が特に重要視されて湾の入り口に**内之浦臨時要塞**が造られた。砲台跡が四箇所、観測所が三箇所、掩燈所・電灯所などが山中に現存している。

九州での決号のため南九州・奄美・玄海灘を中心に各地に海軍震洋、回天、蛟龍、陸軍マルレなどを配備した特攻基地が出現し、**第一一二震洋隊間泊基地**等をはじめ各地に残っている。一九四五年には大分県大神に人間魚雷回天の訓練基地が開隊され格納壕・魚雷著制場等が遺存している。

⑥軍工場・軍需工場

当地においても、近代日本の軍拡期に多くの軍工場・軍需工場が成立した。関東大震災以降、軍工場の分散に伴い一九三三年**小倉造兵廠**を陸軍直営工場として開庁し、工場では、軍刀、軽戦車、小銃・機関砲等の銃器類、各種砲弾、最末期には風船爆弾等も製造した。それに伴い充填する火薬等の生産を鹿児島本線側に**東京第二造兵廠荒尾製造所**を、日豊本線側には**坂ノ市製造所**を造営し、民間の三井染料・日本窒素等製造の火薬等と連環する製造網とする。同様に裾野の広域な航空機生産でも、軍直営の第二〇海軍航空廠から他工廠へと生産規模を増大させる。さらに、**九州飛行機株式会社**、**三菱重工業熊本航空機製作所**等の**民間軍需工場**の工場施設も一部には遺存する。

特に**東京第二陸軍製造所曾根製造所**は、大久野島等で製造されたイペリット等の毒ガスを、迫撃砲弾等に充填・填実する施設である。日本の戦争加害を示す国内有数の遺跡であり、本格的調査と保存に向けた運動が必要である。



東京第二陸軍製造所曾根製造所
北九州市南区

⑦長崎原爆遺跡と空襲遺跡

一九四五年八月九日長崎市に投下された原子爆弾の被害を伝える遺跡であり**爆心地・旧城山国民学校校舎・浦上天主堂旧鐘楼・旧長崎医科大学門柱・山王神社二の鳥居**が国史跡に指定されている。

さらに長崎市が独自に建物のほか橋梁や植物等の被爆建造物等を示し保存啓発を図っている。また大戦末期の**中小都市空襲に関わる爆弾痕跡や諸慰霊等**が各地に残されている。また、膨大な被爆資料・遺物が長崎原爆資料館で所蔵されている。併せて、戦後米海兵隊撮影のカラー・白黒写真も貴重である。



国史跡「長崎原爆遺跡 山王神社二の鳥居」長崎市

⑧B29戦略爆撃、米艦載機、極東航空軍による戦術空襲

九州地域への空襲は、以下の事柄に大別され特徴化される。①中国大陸延安周辺の成都四基地からの「第20爆撃機集団第5航空軍（第40・444・462・46 群団8）」による八幡、大村、大牟田、熊本等へのB29による爆撃空襲。②マリアナ諸島各基地からの「第21爆撃機集団（第73・313・314・58・315航空団）」による全国の大都市及び中小都市へのB29による爆撃空襲、沖縄作戦支援としてのB29による戦術爆撃。③米海軍第5艦隊・第58任務部隊（第58.1～58.4任務群）による全国・九州各都市・戦術目標への艦載機攻撃空襲。④沖縄本島・周辺諸島からの米極東航空軍第5航空軍（第5爆撃機集団、第5戦闘機集団、夜間戦闘機戦隊、写真偵察群団）、第7航空軍（第7爆撃機集団、第7戦闘機集団）による九州各都市・戦術目標へのオリンピック作戦（米軍による九州上陸作戦）での攻撃空襲

⑨朝鮮人徴用と連合軍俘虜労働等

朝鮮人徴用問題については、熊本県内の三菱重工業熊本航空機製作所地下工場に関わる「指紋捺捺制度を考える熊本の会」による調査のみで、熊本県内・九州の全容は把握していない。

また、熊本県内では連合軍俘虜と国内俘虜収容所、福岡俘虜収容所第1分所（熊本健軍）、福岡俘虜収容所第6派遣所（芦北町田ノ浦）の調査を行っている。『捕虜収容所・民間人抑留所事典 日本国内編』すいれん舎 2023年



田浦捕虜収容所での1944年12月プロパガンダ「クリスマスイベント」

3 熊本での「二本の事例」

Q：戦後80年を迎えるにあたり、どのような視点の報道が必要でしょうか？

～「戦争遺産の視点」と「証言・記録の整理」

これまで目をむけることができなかった「心情への視点」を～

3-1 空襲被害と加害の実相

※平和継承リーフ『M76焼夷弾と熊本空襲』『空襲下の熊本』

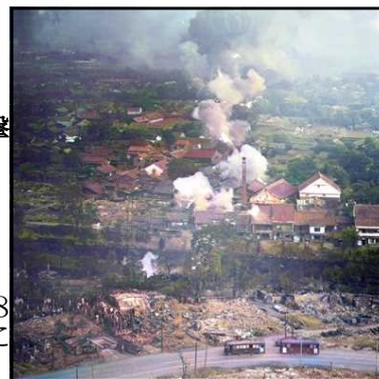
(1) 「第一回熊本大空襲」の再検証

□昭和20年7月1日深夜、B29戦略爆撃機154機・夜間焼夷弾攻撃

□全国中小都市への戦略爆撃

熊本市は全国160中小都市の16番目の人口数

□照明弾利用と過日証言の読み込む、掘り起こし



1945年8月10日米軍機市街地空襲、AIでのカラー化

(2) 第2回 熊本大空襲

□昭和20年8月10日午前 B24・B25・A20・A26・P47・P38

□継続した都市空襲としてだけではなく、沖縄移駐の陸軍航空群による「九州上陸作戦（オリンピック作戦）」前哨戦の位置づけ

①M76落下傘付き500ポンド大型焼夷弾

□ナバーム弾を含め多様な焼夷弾構成、徹底した攻撃

□ヒロシマ・ナガサキ「原爆」投下で帰結する爆撃思想

②眼下の熊本市街地、関わる証言の“継承”

□沖縄移駐の第5航空団第3爆撃群団の各爆撃機による攻撃

□空襲に関わる残された証言の掘り起こしとその検証

③紙の爆弾「伝単（でんたん）」

□昭和20年8月、熊本市・天草他「伝単五種」を投下

□日本国民に告ぐ伝単、無条件降伏の意義伝単、ポツダム宣言伝単、トルーマン伝単 他 約50万枚

□昭和二十年八月十二日熊本日日新聞に「熊本市に紙の爆弾 傳単の内容を喋れば敵罰敵の思想謀略」記事が掲載され。

熊本市内での伝単投下を、8月10日「第2回熊本大空襲」

当日が「初投下」とであると報じている。

□戦場及び占領地、敵国（内地・銃後）への「情報戦」



本渡投下ポツダム宣言伝単

(3) 地方のまち「松橋空襲」と今も続く「ウクライナ戦争」

①「松橋空襲とは」何か ※平和継承リーフ『松橋空襲』

□熊本での「地方のまちへの空襲」を改めて「見つめ直す」

□「川尻・緑川空襲と宇土空襲」を含め、鉄道等「インフラ攻撃」のわかりやすい姿

②戦争遺跡・鉄道遺産としての「永代橋梁」

□下部構造（躯体）は、橋脚2基・橋台2基で構成

□上部構造は、桁連数三連の「三径間単純鋼桁（ガーダー）橋」、橋長40.74mを計測

□九州鉄道時代の貴重な鉄道・近代化遺産であり、全体構造等の継続調査が必要

□橋梁第一橋脚への「爆弾痕跡と機銃弾跡」の調査・測量、文化財として残し、活用する！



左：松橋駅の惨劇 昭和20年7月27日の空襲様子
夏目信彦氏著『記憶のなかの色紙』より
右：第1番橋脚西面の機銃弾・弾痕状況

③ 墜落したB25と5名の搭乗員

- 墜落機体 North American 「B-25」 Mitchells J型機
- 第5爆撃機集団 第345爆撃機群団 第498戦隊所属機：沖縄伊江島基地
- 機体型番：4-31300 機体に通称は「エアパッチ」
- 墜落日：1945年8月7日
- 墜落地：旧鏡村「氷川河口・氷川左岸」
- 墜落機搭乗員
 - 主パイロット Robert G. Neal大尉 NY Buffalo出身（後列左 ロバート・ニール）
 - サブパイロット Louis J. Winiecki, Jr大尉 NY Lancaster出身（後列右 ルイス・ウィニッキ）
 - 航法士 Richard S. Lane 大尉 NJ Ridgewood出身（前列左 リチャード・レーン）
 - 機関士 Robert W. Goulet 軍曹 NY出身（前列中 ロバート・グワレット）
 - 通信士 William Cohen軍曹 NY New York出身（前列右 ウィリアム・コーエン）



右：1945年8月7日、
氷川に墜落したB25
機の機長・搭乗員
古牧昭三氏提供
左：沖縄伊江島基地か
ら離陸するB25機
工藤洋三氏提供

④ 「今だから話せる」「もう話してもよからう」という戦争証言

- 古賀昭代さん（85歳・当時国民学校4年生）の証言
「若い米兵達は、後ろ手に縛られ引っ張られていた」「国防婦人会の約20人が、もんぺに鉢巻きを締め、薙刀を持つ姿に圧倒された」
- 塚本 太さん（82歳・当時国民学校2年生）の証言
「米兵と対峙した父」「墜落時の米兵と住民」「芝口集落を歩く、5人の米兵・荷だを目撃」

(4) 西部軍第三事件、「敵機捕獲搭乗員」処刑

- 内地での捕虜飛行士は、「一般捕虜」ではなく、戦犯容疑「敵機捕獲搭乗員」
- 総数568人で、無事本国への生還者は303人
- 捕虜は熊本憲兵隊本部で取り調べを受けたのち、福岡西部軍司令部へ列車で連行される。
- 途中、荒木・筑紫駅付近で米軍機による銃撃「西鉄筑紫野駅銃撃事件」（1945年8月8日11時30分）を受け、連行中の憲兵1名が死亡する。幽閉されたのち15日に油山で処刑された。
- 1945年5月頃以降に西部軍司令部に収容された飛行士40～41人は、「日本人市民に対する無差別爆撃の罪」の理由で6月20日（第一事件）、8月10日（第二事件）、8月15日（第三事件）に3回にわたって処刑された。これらの事件を通称「西部軍事件」という。
- 搭乗員斬首事件裁判（GHQ報告書第420号 再審記録第288号）
- 裁判の期間：1948年10月11日～12月29日

(5) 熊本初空襲（1944年11月21日）「柿原空襲」は臨機目標、空襲の「プロパガンダ」

- 中国大陸延安周辺の成都近郊の四基地から、第20爆撃機集団第5航空軍による空襲
- 大村・第二海軍航空廠、上海、南京への空襲
- 臨機目標へは「15機」、大牟田初空襲（8機）、一機が「柿原空襲該当機」
- 投弾は通常爆弾9発・焼夷弾4発の「計13発」、空襲は「米機が盲爆」「恐ルルニ足ラズ」

3-2 天草地域の個人慰霊「軍人像」

(1) 軍人像とは

軍人像とは、明治以降の近代戦争で亡くなれた軍人を慰霊・顕彰する目的で製作・設置された像である。

戦争遺跡研究会清水啓介氏の設置形態を基にした分類では「**個人慰霊軍人像・個人顕彰軍人像・集合軍人群像**」の3分類がなされている。また、軍人像材質は「屋外建立では銅製・コンクリート製・石製で、屋内安置は木製」であり、個人慰霊軍人像は「父・母・兄等遺族による建立が全てで、設置場所は墓地や個人敷地内が多い」、個人顕彰軍人像は「建設会や顕彰会等団体による建立が多く、神社や寺院境内が多い」ことが確認されている。

また、古来より「武運長久を祈る神」が、近代で「武勲を立て勇敢に戦死した軍人が神格化」した「軍神像」とは区別する。先の清水啓介氏の愛知県中心とした2016年段階での調査・分類では「**個人慰霊軍人像34体、個人顕彰軍人像56体、集合軍人群像12群**」が確認されている。また、未公開ではあるが、愛知県美術館平瀬礼太氏により「愛知県内の軍人像」調査が進められている。



□山本家軍人像

(2) **山本家軍人像** ※本形式は仮称「**栖本型・Ⅱ類**」に分類か

上天草市大矢野町中柳 9 8 7 7

- 像名：**陸軍上等兵 山本久七**
- 石材：**凝灰岩製か** 全身に黒色コーラル状液を厚く塗布
- 装備：陸軍軍衣、三八式歩兵銃、前ごう、後ごう、背のう、飯盒、雑嚢、剣差 他
- 規格：全高：1 6 0 cm、全幅 5 0 cm
- 台座高：3 8 cm、台座幅 5 6 cm
- 戒名：不明 □石工名：記載なし
- 銘文：故陸軍歩兵上等兵 山本久七之墓 昭和十五年八月
建立者 山本九八
- 備考：墓所整理時に他所より移築か、親族が管理

(3) **軍人丸大明神さん** 上天草市松島町合津 6 1 0 0 - 1 7

- 像名：**軍人大明神「嶋崎憲治」像**
- 石材：**頁岩製**。2 5 年程前に全身灰色・縁部赤色に塗彩。現在は、慰霊用の屋外の祠内に安置され、蝋燭すすで黒色に変じる。
- 陸軍軍衣。当初は左手に軍刀を保持か。
- 全高：3 0 c m、全幅：1 2 c m
- 銘文：不明。家族証言では、中支派遣榮第一六四五部隊第三中隊所属、昭和一九年八月七日戦死。出征時に武運長久を願い、建立
- 建立者：嶋崎憲治郎 □石工：姫戸町矢岳の某石工



□軍人丸大明神像

(4) **熊本県内事例と下浦石工** ※2024年10月7日現在

熊本県内個人慰霊軍人像事例では、天草市栖本町5体（山崎家・福原家・玉田家・前田家・林邊家）、同市河浦町立岩1体（本多家）、上天草市龍ヶ岳町大道1体（太田家）、倉岳町浦1体（岳本家）天草市本渡本泉1体（原田家）、天草市栢宇土町1体（岩永家）の「**計10体**」が確認

また、上天草市松島町・大矢野町（藤本家・山本家・嶋崎家）に3体、人吉市城本町（内山家）に1体、八代市泉村久連子（中村家・川野家・上田家・仲川家）に4体の「**計8体**」の石製軍人像所在情報が確認できている。本軍人像の幾つかは、下浦石工集団による造作であり、故人慰霊の姿と全容調査が必要である。

熊本県内には、通潤橋を造作した種山石工をはじめ、多様な石工集団が所在する。ここ天草では下浦町に、「加工しやすい砂岩と良港に恵まれた」ことから、およそ300年の歴史を有する「下浦石工」の集団がある。19世紀以降は、下浦産砂岩の需要が急速に高まり、建築資材として社寺の参道敷石の提供が行われ、それは本渡「祇園橋」で結実する。

4 **まとめ ～記録としての映像、検証を正確に!～**

□ウクライナ戦争と重なる「**太平洋戦争**」と「**九州の戦争遺跡**」「**熊本の戦争遺産**」の姿
南西諸島有事に関わる「**沖縄戦と九州への疎開**」「**学童疎開**」
2016年熊本地震での避難生活の姿

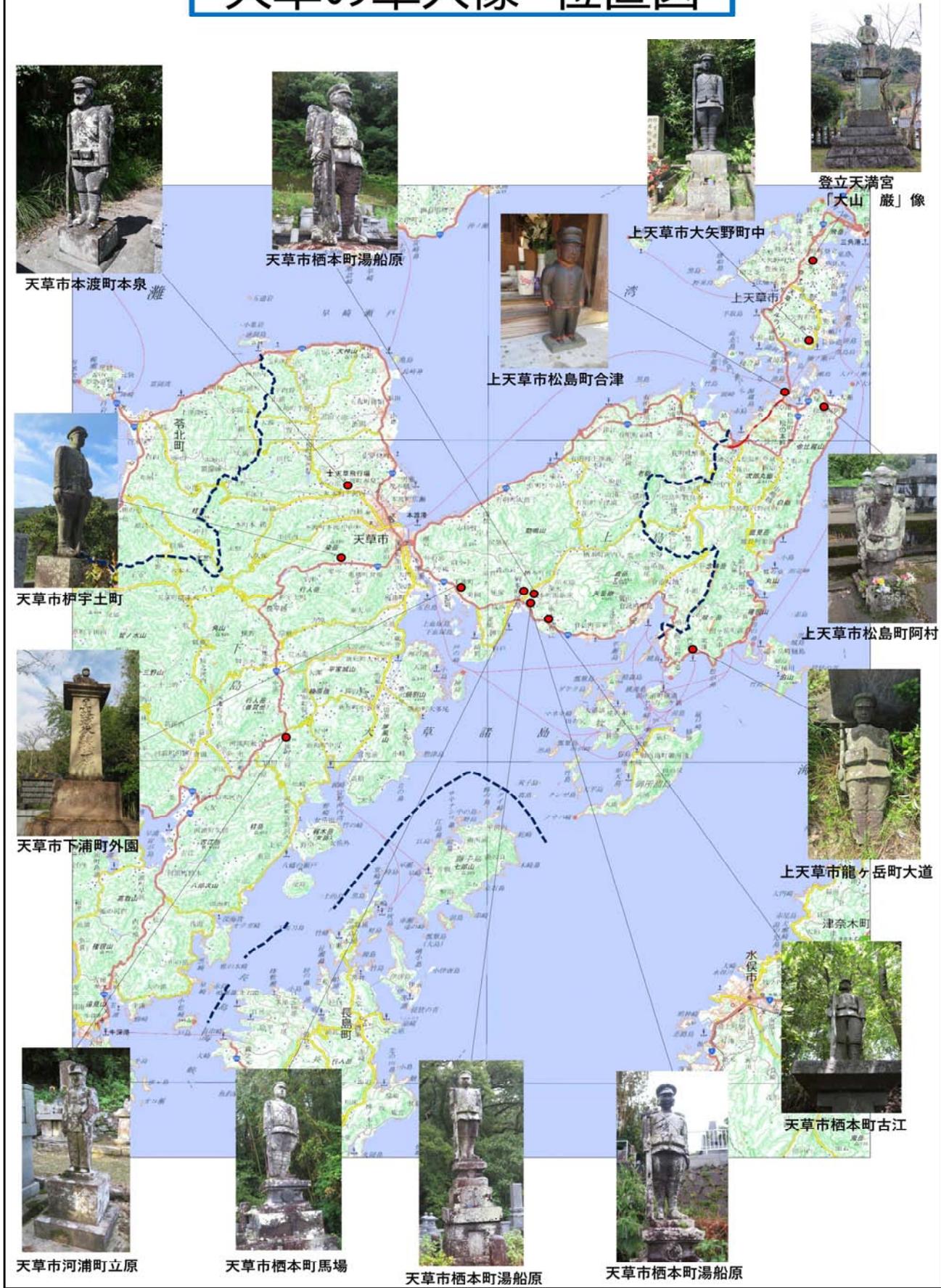
□あらためて「**加害と被害**」の諸相を、各県事例から調べる!
活字や映像の「**証言**」を調べる! 重ねる!
九州の戦争の歴史に関わる「**ニッチ**」を探る! 伝える!

- 熊本の「**血**」と「**智**」、九州各地域の特性を基にした「**地**」による平和継承
 - ①戦争遺跡の調査、保存、継承・活用
 - ②戦争遺跡・遺産は、貴重な歴史資料として「**国民共有の財産“文化財”**」
 - ③市民活動として、戦争遺産調査と継承は「**地域協働の平和学**」
 - ④広島と長崎「**被爆体験伝承者・平和案内人**」による非当事者による語りと継承
 - ⑤日本被団協「**ノーベル平和賞受賞**」、共感と連帯の安全保障 「**ヒバクシャの聲**」

□玉名市歴博との共催「**戦後80年 たまな・くまもとの戦争遺産～次世代への継承～**」

天草市文化課
 松本博幸氏及び
 くまもと戦跡ネ
 ット高谷和生作成

天草の軍人像 位置図



天草の石工文化軍人像に

市民団体「くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク」が、天草地域に複数存在する軍人慰霊像の調査を進めている。天草市栖本町を中心に墓地などに建立され、いずれも若い青年の石像。墓誌などの分析から、日中戦争（1937～45年）前後に戦死した地元出身の兵士の像とみられる。

くまもと戦跡ネット調査

調査は2022年6月に始め、今年5月までに、栖本町や上天草市龍ヶ岳町などで計7体の像を確認した。いずれも当時の軍衣や記章、背のうなどの装備を細かく彫り出している。顔立ちや表情が一体ごと異なり、故人の特徴を忠実に再現したことがうかがえる。

栖本町古江地区の軍人像を調査する、くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワークの高谷和生代表（天草市）



7体確認 戦死者遺族 作製依頼か

同ネットワーク代表の高谷和生さん（68）＝玉名市＝によると、石材は天草市五和町一帯で産出され、古くから墓石などに使われた「御領石」。製作者名が刻まれているものもあり、「石工の里」として知られる同市下浦町の職人らを中心に作られたことも分かった。

墓誌には「昭和三年一月十日第六師団熊本歩兵第十三聯隊入隊」「日支軍交勃発スル昭和十三年八月二十二日」などの記述がある。日中戦争前後の戦死者とみている。建立者は家族や在郷軍人会だ。高谷さんによると、軍隊で

高い地位にあったり、「軍神」として祭られたりする人物ではない個人の慰霊像の調査事例は少ない。「天草は石工の文化があり、遺族らが吊いのため、入隊時などの写真を参考にして、戦死者の像の作製を依頼したのではないかと推測する。

5月下旬には栖本町古江を訪れ、地元住民の案内で、稚児崎公民館近くに残る軍人像を調査。像の大きさ、兵士の名前や建立者などを確認した。「地域の思いと石工文化のつながりで生まれたとみられる軍人像は、天草の地域に残る戦争の傷跡でもある。今後、天草全域で軍人像の調査を進め、広がりや像の地域特性などを探りたい」と高谷さん。同ネットワークでは情報提供を求めている。☎090（1513）5528。（清水咲彩）

栖本町の利明寺近くの軍人像。一体ずつ顔が違い、あどけなさが残る表情の像もある



連絡先
くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク 代表
平和憲法を活かす熊本県民の会 代表幹事 高谷 和生
個人携帯 090-1513-5528
Eメール takayanagi912@yahoo.co.jp
HP URL https://www.kumamoto-senseki.net/

記憶の継承へ保存進めて

消失する戦争遺跡

所在地のリストを入手。43都道府県の216市区町村にアンケートを実施して現状を聞いた。

熊本県内からの報告は、熊本市

の「田原坂古戦場」「騎兵第6連隊兵舎跡」「歩兵第十三連隊食堂の跡」と、天草市の「天草海軍航空隊遺構」。騎兵第6連隊兵舎跡

太平洋戦争関連の旧軍施設を主とした戦争遺跡について、文化庁の近代遺跡調査に市区町村から報告があった642遺跡のうち約3割が、開発や劣化などのため消失または大部分が消失し、原形をとどめていないことが明らかになった。来年は戦後80年を迎える。戦争体験者が少なくなる中、遺跡を通じて記憶の継承は重要だ。実態の把握や保存に向けた対策が望まれる。

社説

は現存せず、天草海軍航空隊遺構は大半が消失、残る2遺跡は現存となっている。

自治体からは、財源の確保が難しいため、保存に向けた国の財政的支援を求める声が多い。現存する戦争遺跡を全て保存するのは、費用や安全性の観点からも困難だろう。文化庁は、調査の報告書を刊行していないが、早急に結果をまとめて分析し、保存の対象や基準などの方針を示してもらいたい。

文化庁の調査は1996年に始まった。国による調査としては唯一とされ、幕末・開国ごろから第2次世界大戦終結ごろの「軍事に関する遺跡」を対象としている。共同通信が情報公開請求で遺跡と

消失した遺跡について市区町村に理由を尋ねたところ、住民や所有者の意向による取り壊し、開発や建て替えによる工事、経年劣化などが挙げられた。安全性が確保できず解体された例もあった。天草

自治体が独自で保存を進めている例もある。神奈川県川崎市は「地域文化財顕彰制度」を創設し、旧陸軍登戸研究所を選んだ。北海道別海町は旧陸軍飛行場の施設跡を「歴史文化遺産」として保護して

いる。国が地域の戦争遺跡をよく

知る自治体と連携し、調査や保存に予算措置を講じるなどの施策も考える必要があるだろう。

一方で、各地の市民団体が戦争遺跡の調査や啓発活動に取り組んでいる。熊本では、くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワークが県内の遺跡の調査や、結果をまとめたリーフレットの作成、見学会などを続けている。戦争関連の資料館設立を目指す取り組みもある。このような民間の活動に、行政が協力していくことも重要ではないか。

2024.9.25

